**大林玄ちゃんを偲んで**

J11　松坂たかよし

玄ちゃんのご家族が５年のロンドン勤務から戻られ、同じ世田谷の豪徳寺に住まわれたことから、時々会って飲んでいました。話題は、時習館在校生時代のことやロンドン勤務時代のことなど、拡がりましたが、いつも玄ちゃんの胸中にあったのは、昭和２０年６月１９日の夜（福岡市、静岡市も）、豊橋が米空軍B29の編隊から焼夷弾爆撃を受け、一夜にして焼野原になった事実をどのように後世に伝えていくか、ということでした。玄ちゃんは、「時習の灯」の編集長として、特集記事にしたいと強く望まれ、その構想に私も賛同して、準備から原稿作成まで３か月を掛けました。時習１回生から１１回生の１、０００人を時習館名簿からランダムに選び、往復はがきでお訊ねしました。「あの被災した夜、あなたは誰とどこでどのように行動されましたか？」と。１００人の方々から回答が寄せられ、玄ちゃんと一緒に分析に取り組みました。あの夜、B29の襲来から、家を焼け出され逃げ惑う深夜から未明にかけて、生々しい悪夢のような情景が再現され、「時習の灯（　号　）」に特集記事として掲載されました。

玄ちゃんは、姉上を豊川工廠被爆で亡くしています。悲しみの思い出を乗り越えて、これも特集記事にまとめ上げました。玄ちゃんの優しさと強い意志を覚えます。

玄ちゃんは, １１回生が卒業５０周年記念事業として取り組んだ、時習館とSt. Paul’s Schoolの交換留学の実現にも力を発揮しました。玄ちゃんと私は、St. Paul’s Schoolを訪ね、スティーブン校長にお会いして、「両校の交流が、日英の次世代の教育に新たな地平線を拡げる。」と熱っぽく話しました。スティーブン校長も、「私もそれを期待します。今は、高校時代に異文化交流することが大事だ、という動きが出てきました。大学に入ってからでは遅いと思うのです。」と、応えてくれました。ニューヨークにも勤務した経験をもつ玄ちゃんの世界観と志が通じたのだ、と今でも思います。

一昨年でしたか、玄ちゃんご夫妻に誘われて、三軒茶屋キリスト教会の礼拝に参加しました。礼拝のあと、聖路加病院、日野原重明名誉院長のお話を伺いました。元気溌剌として、生きることの意味と大切さを説いてくれました。私にとってこれから歩む道を示してくれた素晴らしいお話でした。玄ちゃんご夫妻の思いやりに感謝しています。

昨年の秋、玄ちゃんご夫妻と食事を共にし、軽く飲みました。談笑のあと元気に「じゃあな！」と声を掛け合って別れました。

玄ちゃんは、今も私の胸中にいきいきと生きておられます。囲碁の師匠として、海外勤務を経験し、同じ時代を分かち合った親友として。

何か困難が生じたら、「こんな時、玄ちゃんならどうするのかな？」。

これからも、ずーっと、相談相手になって下さい。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（以上です）